譬喩談

泉鏡花作

一

「へい、唯今。」

使ひに遣りし下男今歸り來て、主人の前に畏まれり。主人は机の上の時計を視め、

「おや、五時だ。もう間に合はないから其端書は要らない。」

と勃然として彼方を向く。下男は頻に揉手しながら、

「へい、何うも相濟みません。御勘辨なすつて…」

主人は不興氣に、

「（ト）の便で出さないと、翌朝の（イ）便まで後れつちまふ。其では都合が惡いから、丁度三十分前、左様だ、四時半に買ひに遣つたのだ。賣捌所は近所だのに、今まで何をして居た。」

と以ての外の氣色なり。下男は恐る／＼、

「えゝ、つい其何でございます。直ぐ端書を求め

まして、さつさと歸つて參りますと、旦那樣、　横町の角で若い者が二人、血塗になつて取組合ひ、死ぬわ、殺すといふ騷なんで、恐がつて仲裁する者もございませんで、私があつかひまして見事に手打をさせました。」

下男は譽められる目算なりし。主人は案外にも眉を顰め、

「此奴、餘計なことをする。」

「いえ、餘許なことではございません。」

「ナニ餘計なことがないものか。喧嘩の仲裁をしたつて、己の、汝の主人の、用を缺いて何になる。」

と怒解けず。我が意の如くならざる者は召使ふも無益なりとて、即時下男を解傭せり。

下男が暇出されて、出行きたる後、下婢は今届きたる一通の封書を齎し來りぬ。こは東京に遊學せしめつゝある、主人の息子よりの來信なりき。主人は一披讀して赫となり、直ちに細君を呼びて聲荒く、

「忰は今日限勘當するぞ。」

細君は吃驚し、

「えゝ御勘當遊ばすとえ、大變ですね、何咎で。」
血相變ふれば落着拂ひ、
「己の思ふ樣にならぬ奴は悴だつて何にする。今度の試驗に落第した濟みませんといつて寄越したから其で未練なく勘當するのだ。」
恰も敝履を捨つるが如し。細君は堪へ兼ねて座を進み、
「たつたそれしきに御勘當とはまあ何事でございます。これが何も放蕩をしたといふではなし。」
と皆まで言はせず言を遮り、
「いや、放蕩はしても可い、學問に出してあるのだから何がなしずん／＼及第すれば其で可いのだ。入費は構はぬ、些放蕩をしたいから金子を下さいと謂へば、隨分送つて遣る。學問の邪魔にさへならなければ、女郎買をしようが藝者狂をしようが、そりや何も彼奴の勝手だ。しかし己の本意に背いて、落第したから容赦はせぬ。向後ふつゝり學資金は送らない。」
と一旦口へ言出しては我意を通さねば措かぬ氣象、

動く気色は見えざりけり。

細君は、餘りのことに涙ぐみ、

「そりや貴下餘りです。」

「いや一度いうたことは決して變へぬ、何でも己が口から出たことは、此家だけには法律だと心得ろ。」

と接穂なく言放てり。細君は返すべき言葉もなければ、折を察て取なさむと、爾時は默して止みぬ。主人もしばらく默したるが、俄に、

「うむ飯を呉れろ、腹が空いた。」

と晩餐を命じたり。膳はやがて主人の前に据ゑられぬ。主人は膳の上をじろりと見るより、また忽ち機嫌を損じ、

「何だこりや鮪の刺身だな。こら！　晩には牛肉にしろといつて置いたに、こりや何うしたんだ。」

細君はギクリ、「はい。」

「（はい）　では無い。誰の指揮で此様なものをつける。」

「はい。」

「えゝ、（はい）　では無い哩。誰がこんな指揮

をした。」
と威丈高。細君はおど／／しながら、
「はい。」
「また（はい）か。」
「はい。」
「何だと！」
「はい。おや、御免なさいまし。貴下は牛とおつしやいましたが、先刻魚屋が参りまして、鮪があると申しますから、豫て御好ではございますし。可からうと存じて造らせて置きましたが、お氣に召しませんでしたか、誠に惡うございました。」

主人は少しく面を和げ、
「ふむ、己を喜ばせようと思つてしたことか。イヤ其志は嬉しいが、方法が宜しくない。己が喰ひたいと思へばこそ、牛にしろといつたんだ。好物な物でも時に因ると欲く無いことがある。何と、汝にも其様なことがあらうでは無いか。」
「ございますとも、貴下。」
「それ見ろ、だから何もむづかしい事あ無い。萬事己のいひつけ通りにすれば其で可いのよ。自分が

嫌なことを斯うせい如彼せいと謂ふ道理は無いから、總ていふ通りにさへ守つてしてくれゝば、其で己の思ふ様になるといふものだ。何でもこれからは、何時も口癖にいふこつたが、己の思ふ通りにしなければ不可ぞ。宜しいか、今日のことは許して遣る。

主人は心解けて晩餐を終れり。さて茶を煎じて内證談話、

「やがて盆にもなつたら、下女に浴衣地を買つて遣れ、而して小遣も多分に氣を着けて遣んなさい。

細君は感心したる顔色にて、

「ようお氣が着きました。嘸喜ぶでございませう。」

聞くより主人は苦い顔、

「ナニ喜ぶ、何も喜ばせて奉公人の機嫌を取るにやあ當らない。」

「でも貴下。」

「いゝや、喜ぶなんて餘計なことだ。おゝ、浴衣地と謂へば此浴衣な、汗になつたから、洗つてくれ、翌日洗へば晩までには乾くだらう。」

細君は頷き、

「えゝ乾きますとも。」

「可し違ひないな。何でも己の謂ふことは一々掟だと心得ろよ。」

主人は何に依らず、己が意の如くならむことを欲するなり。

二

世にものゝ不如意なるほど不愉快なることはあらざるべし。本篇の主人公は、愉快に生活せむことを唯一の目的とせる人物なり。然れば意の如くならざるよりして、官職を辭し、朋友と絶せしこともあり。いまた下男を解傭し、はた一人の息子を棄てぬ。餘す處は唯細君と下婦とのみ。但渠は巨多の富を有せり。諺に人間萬事金子なりといふ、其金子はあれども、なほ何事も心に任せず、要するに渠は人をして己の如くならしめむと欲して、然もこれを得ざるなり。得ざれども求めて休まず、そも如何にしてかこれを得む。

翌日は朝來雨降る。頃日の蒸暑きに轉た天候の不如意なるを歎きし主人公は、これがために苦熱を洗ひて、聊か意に満ちたるものゝ如く、快然として時を消せり。

晩景散策に出づるとて、豫て命じ置きし浴衣の洗濯したるを持來るべしと、細君にいふ、然るに細君

は気の毒さうに、
「も一枚のを召して行らしつて下さいまし、まだ彼の洗濯は出來ません。」
主人は直ちに眉間に筋、
「何だ、出來ない、出來ないといふは何ういふ理窟だ。」
細君はびく／＼もの、
「だつても貴下、朝から降通しでございますもの、洗ひましても乾かないだらうぢやございませんか。」
とは道理なる言譯なり。されど主人には道理とは聞えず、
「降らうと降るまいとそりや我の構つたことでは無い、唯我のいふ通りに洗濯をしとけば可い、骨を盗みやがつで、このひきずりめ。
と言罵る。餘りなれば腹を立て、
「そんな御無理をおつしやつたつて、どしや降でしたもの、しやうがございません。」
と細君も少し勃氣。主人はます／＼息卷荒く、
「洗つた上で雨が降れば炭火で以て乾かすが可いや。」　と途方もないことを謂ふ。

細君はひたと呆れ、
「いかなこつても、其様なことをしようものなら、一時に炭の一俵も發火さねばなりません。」
「一俵でも、二俵でも、乃至また三俵でも、浴衣の乾くほど發火すこつた。其手段は何であらうと、唯我の思ふ様に浴衣を洗濯しとけば可いのだ。昨日もいつた通り、我の口から命じたことは、此家だけには法律だ。法律を犯した奴は、立處に罰して遣る。」

只ばかりありて主人公は遂に細君を離縁しつ。噫いかなれば斯く不如意なる、おのれ意の如くならざるべからざる位置も財産もありながら、と思屈して、ついうと／＼と轉寢したり。

下婢はこれを見て掻卷を持來り、
「もし／＼、旦那様。お風邪を召しては不可ませぬよ。」
いひながら靜にこれを着懸けしが、なほ心着かで眠りたり。下婢は再び枕を運び、ソと主人の頭を擡げて、下に掻込まむとなしけるに、主人は思はず眼

を覺し、それと見るより怒の面色、
「えイ何をする！　折角氣持よく寢て居たものを餘計なことをして覺しやあがる。誰が枕をさせろと謂つた。」

思懸けなき腹立に、下婢は案外の眼を瞠り、
「はい、誠に惡うございました。私はまた旦那樣が轉寐を遊ばして、お風邪を召してはなりませぬと憚りながら存じまして。」

いはぜも果てず、睨み着け、
「風邪をひくより起される方が我あ嫌だ。汝が何を知つてるもんで、それとも我の心を見抜くことが出來るか。出來たら言はぬことでもするが可い、それが出來ない分際で、何故獨斷でものをする。向後要らぬ世話ア焼くと許さぬぞ。」
散々に叱り飛ばしぬ。

斯ることの度重なるにぞ、下婢は居たゝまらで遁出したり。

主人は獨身者となり終りつ。さて其不如意なることは以前よりも一層甚だし。譬へば米を炊ぐにさへ、修練と、經驗と、はた勞力とを要するなり。渠はじめ少かりし時は、ものごと皆不如意なりき。常に金子あらばと思ひたり。妻子あらば、下婢あらば、下男あらば滿足ならんと思ひたり。然るに勤勉の結果望足りて、嘗て希ひしものは皆これを得たり。然も不如意なること依然として舊の如し。故にまた元の杢阿彌となりぬ。更に一段不如意なるを奈何せむ。

主人は再び下婢下男を要しぬ。よりて新たに雇入れてこれに用をなさしむるに、また意の如くなるはなし。斯の如き者は何かせむと、迫出だして再三雇代へたるが、何時も氣に入るはあらざりき。

斯くて家來を代ふることの餘り度々になりしかば、果は慶庵も呆れ果てゝ、其周旋を辭したりけり。主人もまた、慶庵は無益なりとして、自から家來を選抜するの、最も如意なるべきを知りつ、めがねに叶ふ者あらば召抱へむと、搜しに出でぬ。

三

家來を捜しに出でたる主人は、行く／／心に謂へらく、「一體己に優つた者が、己の奴隷になる理窟は無い。優勝劣敗の世の中だ。己の奴隷になる者は、皆な己より劣等な奴等だ。其癖、生意氣に氣轉を利かせるから、得て仕損ひばつかりする。何だと謂ふと、奴等相應に智慧があつて、自分といふ役介者を働かせようとするから起る。元來人の心中を見透かす眼力も無い癖に、此方の謂はぬ事を先方から察してするのが間違つてる。試に見たが可い、彼の鐵砲は何うだ、鐵砲は的を射るものに違ひないが、要らざる人間といふ心のある動物が、手でこれをもつて命中ようとするから、手が震へたり、斜視眼をしたりしてあたらない。もし「鐵砲をあてる。」といふ器械があつて射つた日には、きつと百發百中だらう。馬なんぞも其通り、騎者が止めようとすれば止まり、飛ばさうと思へば飛ぶ、こゝで妙だ。これがもし、我意を出して、騎者の命に從はなかつたら不如意極まる。して見ると主人のいひつけに從つて、何でも彼でも自分といふものを忘れて

働くのが欲い。詰りは斯うだ、飯を炊くにも、使に行くにも、すべて器械的にやつて、己の手足の代用をする者は居ないか知らん。何がなしに我のために働いて自分といふ者を働かせないのが雇ひたい。」

と斯るむづかしき註文しながら漫歩行したる主人公は、餘り深く考へたるため、思はずも我を忘れて、昔の哲學者ならなくに路傍の川に陥りたり。

泳を知らぬ人物ならねど、不意に面くらつて、したゝか水を飲み、眞蒼になりてやう／＼這上り、極惡氣に見廻せば、幸ひ四邊に人も無し。唯一人汀に立ちて、ものおもはしげなる小僧あり。先刻より其處に居たらむが、溺るゝを見て助けむともせず、はた今水を吐きなどするを、見ながら見ざる如くにて、見舞うてもくれざるにぞ、主人は其薄情なるを怨むより、寧ろ怪むの念起り、身震ひしながら傍に進み、

「小僧様何をして居るのだ。」

唐突ながら問懸けたり、小僧は冷然として振返り、

「ちと考へて居ります。」

「はゝあ、イヤ何を考へて居るのか知らん、今我

は此川へ落こちたんだが。」
といへば小僧は冷かに、
「なるほど左様でございましたか。」
「これは訝しい、和郎は先刻から其處に居たぢやあないか。」
「はい、居ました。」
「それぢやに落ちたのを知らないとは？」
「旦那がお落ちなすつたのはよく見て居りました。」
と平氣な顔、主人は急込み、
「見ながら知らぬ顔は餘りだ。」
小僧は殆ど意に介せず、微笑みながら、
「左様な閑はございません。些考へて居りますので。」
これを聞ける主人公は、小僧が人を見殺にせむずるまで思案に沈むはそも／＼いかに重大の件なるべきと聞きたくなり、
「して其思慮事といふのは何だな。」
「他でもございません、私は田舎の者で當地へ

參つて奉公をいたしますが、これまで何軒歩いても皆氣に入らないつて追出してしまひます。餘り度々だから慶庵でも愛想を蠢かして、最早世話をして呉れません。一體まあ何うしたら主人の氣に入るだらうと、其を思慮て居りますが、何たつて世の中に主人ほどむづかしいものはございません。で、可い思慮は出ませぬから誰も雇つてくれ人もあるまい、しやうがないから此川へ身でも投げようかと思ふんです。はい、それですもの、旦那、人の川へ落ちたくらゐ構つちやあ居られませ。」

主人は何となく感深し。「うむなるほど。」

小僧は好き相談對手を得たりと思ひ、

「何うでせう旦那、何か主人の氣に入るといふ工夫はございますまいか。御存じなら教へて下さい。」

問はれて主人は無雜作に、

「うむ先づ何故氣に入らぬかといふことを研究して懸ることだ。」

「へい。」

「何でもそりや餘計なことをするからだらう。」

と自分の思ふことを謂ふ。小僧には少しも解らず。

「餘許なことつて何でございます。

主人は儼然として講師の理科を説く如く、

「されば さ、主人の使に出て、道で喧嘩の仲裁をして、其がために用を缺いたり、折角可い氣持で寢て居る者を夜着を被せようとして起したり、こりや皆人よかれと思つてする餘計なことだ。萬事斯ういふ風だととても気に入る氣遣はないな。」

小僧は妙な顔をして、

「へい、でもね、決して左様なことはいたしません。はい、私は至極正直者で、何だつても旦那主人のいひつけないことはいたしません、しかし其が向うの気に入りませんよ。」

「はてな、そりや何ういふ理由だらう。」

と主人は訝る。

「主人の何時もいひますには、一々指圖をしないでも、自分の才で遣れば可いに、埒の明かぬ、氣の利かない一體馬鹿正直だから不可いつてね、私の正直なのを馬鹿にします。」　と小僧は不平なり。

主人は思ふ壺なれば、「此小僧なか／／談せるな。」と頼母しく、「うゝ、おもしろい、世間の奴は不殘此小僧の取柄を知らぬと見える、馬鹿が氣に入つた、今自分の事を思慮てゝ我のあぶ／／を知らぬ顔が古今無類と難有い。これから人助けをしよいうなんて、端書の使を棚へあげるやうな憂慮はない。」と心に頷き、

「小僧我が雇つて遣らう。」

小僧は大きに喜び勇み、

「や、旦那がお使ひ下さいますか。」　主人、

「むゝ、使つて遣る。」

「また氣が利かないなんて追出されやしないだらうか。」

と呟くが如くにいふ。主人、

「何の、氣が利かれて堪るものか。」

四

主人は自から擇びし小僧なれば、渠に對するの處置は未だ嘗てあらざりしほど寛悠なりき。

小僧もまた至つて重寶なるものにして、走使は謂ふも更なり。飯も炊き、菜も拵へ、家事萬端何一つこれが出來ぬといふことなし。然れども主人が用を命ぜざれば、僵れたものを起さむともせず、單唯々として命を奉ずるのみ。

譬へば晝食の時、小僧は問ふ、

「旦那お菜は何にします。」

主人は今業務を取りて面倒なれば、

「何にでもして置けさ。」

小僧、＞

「何にでもとおつしやつたつて、旦那の好きなものは、私には分りませんな。へい、何にでもとおつしやれば私の好きなものを買つて來ますよ。」

主人は笑ひながら、＞

「手前の好きなものとは何だ。」

「はゝゝ、鰻丼がよろしうございい。」

「え、驕ってくれるな、途方もない。」
「そら、御覽なさい、だから何を買つて參りますとお問ひ申すんです。」
主人は止むを得ず銅貨を投出し、
「それで豆府でも買つて來な。」

小僧は「はい」と飛んで行き、直ちに豆府を購ひ來り、
「旦那買つて來ましたが、何うしませう。」
「何うするもんか喰ふんだあ。」
「そりや召食るは解つてますが、煮ますか、但奴にしますか。」主人、「煮な。」
「へい、醤油は凡そ何の位入れませう、而して鰹節も入れるのですか。」
主人は舌打して、「チヨッ襖惱いな。気の利かない。」
と何心なく呟けば小僧は吃驚して顔色變へ、
「そら／＼萬歳樂々々。」
と耳に蓋して踞まる。
「何だ、其状は？」といひながら自分がいへる

「氣が利かない」　に心着き、なるほど小僧の禁物と主人は思はず噴出だしぬ。

一切が斯る有様なれば、用に立たぬかの如くなれども、主人の命を奉ずるには犬と猿との怜悧と敏捷とを兼備へり。さりとて主人がこれを動かし、且つ監督するにあらざれば、火を吹ぐことをもなさゞるなり。要するに此の小僧は意識を備へたる人間にあらずして、小僧といふなる無心の器械が假に人間になれるなるべし。これしかしながら主人公が註文通りの代物にて所謂如意のものたらむ。

或時主人は小僧を呼び、　「翌日はな、柴又村といふ處まで行つて來ねばならないぞ、可いか、路程は彼此二里もあるし、暑い時分だから朝の中早く行つて歸る目算にしろ。」　と豫め言渡しぬ。

小僧は正直者、畏りて命を奉じ、翌朝眼を覺ますや否ずやに、何等の用事をも聞くに及ばず、宙を飛んで、往復四里半もあらむず道を、三時間ばかりに行きて歸れり。

歸りて見れば、主人は疾くより閨を出でゝ、小僧を使に遣らむものをと、頻りに尋ぬる處なりき。今歸り來るを見るより、

「小僧何處へ行つて居た。だから昨夜いつて置いたに、遊んで歩行いて仕様がないぞ。」

と極めつくれば、小僧は澄した顔色にて、

「へいもうちやんと行つて参りました。」

主人は、訝かり、

「何處へ？」

「へい柴又へ。」　とけろりとして居る。

主人は南無三と呆れ返り、

「用を聞きもしないで手前何をしに行つたんだ。」

と驚けども小僧は平然自若として驚かず、却つて此問を怪む如く、

「だつて昨晩柴又へ行つて來いとおつしやつたから　・・・・・」

と生眞面目なり。主人はイヤハヤといつたきり、深くも咎むることを得ず、苦笑一番默して休めり。

これをしも不如意ならずとせむか、小僧以前の者

にはそも何を以つてか不如意といへる。蓋し此小僧は主人公がめがねにて、自から雇入れたるものなれば、またしてもこれに對して不平、不満を鳴らさむか、さるは自から欺く様にて、己が心にも恥かしければ、さすがの主人も堪忍して、「イヤ萬事斯うありたいものだ。」と負惜みの様なる申譯を、其欲心にいひつゝあり。知るべし何事も人に託せず、自分にこれを行ふは、満足するに最もよき方法なるを。何となれば器械的の小僧を用ゐるは、主人が我が手足を働かすと多く異りたることのなければなり。

古人の句に、（蚊帳を出てまた障子あり夏の月）

人の欲には際限なし。主人豈この小僧を以て足れりとせむや。

五

一夜雲黒く風白き時なりき。主人は所用ありて外出し、亥の刻過ぎて歸りしが、思ふよしありて小僧を呼び、

「汝眠いだらうが、何だか物騒な晩だから夜巡がして貰ひたい。」

小僧はいつもながら元氣よく、

「へい、畏りました。」

「待て、處でな、今己が他から歸つて來ると、裏の垣根の處に胡亂な奴が立つて居た。此奴は怪いと引捕へて見ると、何が隣村の夜巡よ。可しか、譬ひ夜巡の職分でも、餘計な處へ入込んで來ると却つて人に見咎められる。一ケ村の夜巡が一足でも隣村へ踏込むと、最早夜巡ではない胡亂な者だ。汝も左様だぞ、我が家の夜巡なら家の周圍ばかり巡れば可い、要らぬ處へ踏出すと却つて人に怪まれるぞ。」

と嚴かに言渡せり。正直者の小僧は謹みて命を奉じ其まゝ戸外へ飛出だして家の周圍を見巡り居れり。

三十分を經たりければ、主人も、「もうよし」

と内に呼込みしが恰も爾時何やらむものゝ焚ゆる匂せり。

「や、木臭いな何であらう。」

主人の呟くを聞きて小僧は得意顔に、

「へい、誰だか其四五軒さきへ放火をして居る奴がありましたつけから、もうそろ／＼焚出しても可い時分です。」

主人は反返るほど打驚き、

「え！　そいつは異事だ。汝また見て居たか。」

「へい見て居ましたがね、御家でないから默り！」

と莞爾々々して居る。主人は蒼くなり、

「放火を見て居る夜巡があるものか、風はあるし、大變だ。」　と周章て騒ぐ。

小僧は冷然として、

「だつてね、うつかり咎立をすると、此方が盗賊に怪まれませうと思つて。」

「あ、途方もない、此段になつて理窟も何もあるものか。氣の利かないにも程があらあ！」

小僧は縮み上り、

「そら出たぞ／＼、今度は堪忍しさうもない。」とも煙の消ゆるが如く朦朧として消失せたり。此に於て乎主人が理想の、否寧ろ妄想の所謂（如意）なるものは滅し去れり。

火は漸次に燃來りてきい主人の家も危かりしに、嘗て暇を出だしたる女房をはじめとし、下婢下男の輩等まで、舊主人のことを忘れず、數人駈附けて危急を救ひしにぞ、あはよく類燒を免れたり。

斯りしかは主人公は己が如意なりとせる小僧より、不如意なりと思へりし者の遙かに優りて如意なるを悟りつ、こゝにはじめて滿足しぬ。

然り、人生何かよく如意なるべき。たとひ衣食住盡〳〵く意に滿つるとも、天気風雨の不如意なるあり。風雨もまた心に協ふとせむか、更に天壽の不如意あり。こは奈何ともし難かるべし。宇宙に圓滿無缺なるもの造物者を措きてまた他に何かある、然れば濫に意の如くならむことを欲する者は、語を替へてこれを造物者たらむことを希ふものといはざる

いべからず。諸子静に思へ、これ到底所詮、出來得べきことにはあらざるなり。然れども人生欲もまたなくむばあらず、欲なきものは得て何をかなさむ。要は唯欲を節するにあるなり。もしそれ節する能はずして、如意を欲して休まざらむか。可し、我に一法あり。出來得べくむばこれを成せ。曰、

唯梟欲飽くことなき、我といふ者を、斷然此世より取去りて、圓滿なる天堂に生れ行き、如意寶珠を抱くにあるのみ。

【完】